

夏の高校野球 熱戦を終えて

7月9日～26日に開催された、第103回全国高校野球選手権茨城大会。市内からは石岡第一高校と石岡商業高校の2校が出場しました。

昨年は、新型コロナウイルス感染症の影響により全国大会が中止となり、県独自の代替大会が開催されました。今年も学校応援の禁止、観客の入場数制限などがありながらも、優勝すれば甲子園へと繋がる大会として開催。それぞれの思いを持って大会に臨む選手たちの夏を追いました。

歴史を塗り替えた夏

初のベスト4

石岡第一高校

2年前のセンバツ高校野球で初めて甲子園の地に立った石岡一高。当時1年生だった選手たちは今年3年生として、先輩たちが届かなかった『甲子園での1勝』を目標に、大会に臨みました。

投打で実力を発揮する石岡一高は順調に勝ち上がり、これまで阻まれてきた準々決勝も突破。創部初のベスト4進出を果たしました。鹿島学園高校との準決勝で敗れ、惜しくも全国大会出場はなりませんでしたが、歴史を塗り替えた選手たちの活躍に、林健一郎監督は「元々ポテンシャルの高い選手たちだったが、順調に強くなり、甲子園を狙えるチームにまで成長してくれた」と振り返りました。

部員52名のチームを引っ張ってきたキャプテンの松島拓也さんは「新チーム当初は不安もありましたが、ここまで協力してチームを作ってきた3年生、ついてきてくれた1・2年生には感謝しかありません。負けてしまいました。茨城で1番のチームだと思います」と戦い抜いた仲間たちへの感謝の言葉を話しました。石岡一高の歴史に残る夏が終わり、3年生の思いを託された新チームが新たな目標に向けてスタートを切りました。



▲7月22日、ひたちなか市民球場での準々決勝に勝利した石岡第一高校硬式野球部

1人でも「独り」じゃない

感謝を胸に挑んだ夏

石岡商業高校

グラウンドで大きな声を出し、練習に励む1人の選手の姿。石岡商業高校の現在の部員は、2年生の今村陽来さん（写真）のみです。



昨年の夏に3年生が引退後、元々1学年上の部員がいなかったことなどから、1人での活動が続いています。練習をすることも難しい状況に「辞めたくなくなったもありました」と話します。しかし、それでも続けてこられたのは、小倉雄太監督をはじめ、部に携わる先生方が寄り添ってくれて、多くの人が支えてくれたからと、今村さんは感謝の気持ちを口にします。

今大会には4校（石岡商業・潮来・竜ヶ崎南・鹿島灘）連合のチームとして出場。7月14日に臨んだ水戸葵陵高校との試合で残念ながら敗れ「レベルの差を感じた」と悔しさをにじませながらも「いい経験になった。悔しさを糧にして、次は勝ちたい」と前を向きます。

支えを受け、1人で臨んだ大会を終え、集大成となる来年の夏を見据えます。